

続・片倉家仙台屋敷を発掘する！

仙台市教育委員会 平成25年11月17日（日）

【調査理由】青葉山公園（仮）公園センター建設
【調査面積】1,500㎡

【調査期間】平成25年6月24日～12月

【調査担当】仙台市教育委員会 担当：文化財課・テイクイントド横

○「追廻地区」ってどんな場所？

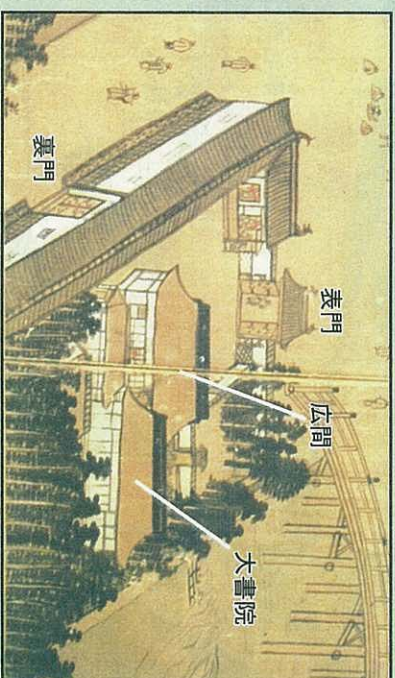
追廻地区は仙台城の一部とされ、広瀬川沿いには石垣が築かれました。城下絵図では最も古い『正保絵図』（1645）をみると、地区の北側は「侍屋敷」、その奥の南側は「馬屋」となっており、近世を通してここは馬に関わる家臣の屋敷や馬場などがあった場所とされています。17世紀後半の寛文年間にはここに佐沼領主の津田景康（玄蕃）の屋敷がありました。明治に入るとこの地区全体が軍の練兵場や射撃場となり、戦後は住宅地となりました。

○「片倉家仙台屋敷」ってなに？

片倉家仙台屋敷とは伊達家の重臣で白石城主の片倉家が仙台の追廻に構えていた屋敷のことです。寛文事件（伊達騒動）後の延宝5年（1677）、片倉家3代当主の片倉景長は屋敷替えにより片平丁から追廻に屋敷を移しました。以後明治にいたるまでこの地は片倉家の仙台屋敷として使用されました。



追廻地区を上空からみたところ（北東から）



『仙台城下図屏風』にみる片倉屋敷
慶応元年（1865） 仙台市博物館所蔵

幕末の弘化3年（1846）には火災により片倉家の屋敷が焼失しましたが、3年後の嘉永2年（1849）には再建され、藩主を迎えたことが『治家記録』や『片倉代々記』の記録にみえます。

現在残る絵図をみると、表門は北側の通りに面し、西側の長沼沿いには長屋や裏門がありました。正面には玄関を伴った広間があり、その南東側には最も重要な建物で儀式や家臣との対面を行う大書院や小書院といった表側の建物が配置されています。屋敷の南東側には中島のある大きな池がみられ、南西側には馬屋が置かれていました。

【平成24年度の調査】

平成24年度に実施した屋敷跡北西部での調査では、再建された屋敷の西側に広がる石敷きや、幕末の火災の処理をした廃棄土坑（ゴミ穴）を確認しました。さらに下層からは火災前に存在していた片倉屋敷などの施設を確認したことで、幾度かの屋敷の変遷があったことが判明しました。

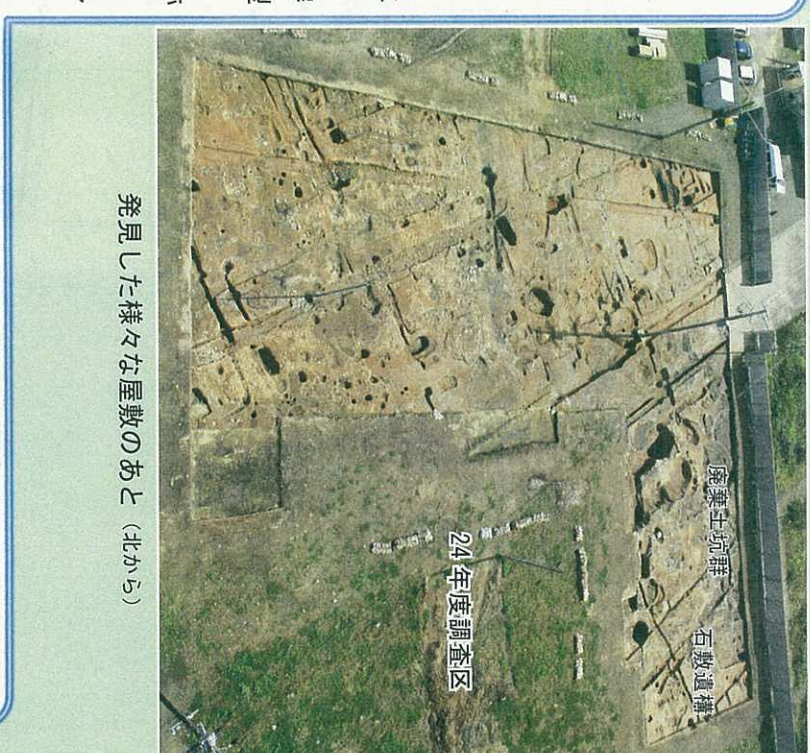
○発掘調査で発見したものは？

今回調査した場所は屋敷の南西部にあたります。調査では昨年の調査と同様に、練兵場の整地の下から石敷きを発見し、その下から数多くの土坑や、さらに土坑より古い建物跡や溝跡などを数多く発見しました。

【発見その1】 火災後に再建された屋敷（1849年～明治初め）

【石敷遺構】2回敷いた石敷きのうち、最初の石敷きが西側に残っていました。石敷きは全体に薄いものです。

【建物跡】5号掘立柱建物跡は柱跡が大きなものですが、堀跡の可能性もあります。南側には柱跡はやや小型ですが、6号礎石建物跡があります。また小石をしっかりと詰めた柱跡の7号礎石建物跡は、より北向きの21号石組溝跡を壊して造っています。これらは絵図に描かれた建物とほぼ同じ方向で建てられています。



発見した様々な屋敷のあと（北から）

【発見その2】 火災の後片付け（1846～1849年）

【廃棄土坑】穴の形は円形や楕円形が多く、大きさは5m以上のものもあります。中には多量の炭などに混じり、多くの瓦や陶磁器などがすてられています。重なり合うものが多く、土坑を掘る際には、再建する予定の主要な建物の場所を避けて掘っていることが考えられます。

【発見その3】 火災前の片倉屋敷や片倉家以前の屋敷（17世紀初め～1846年）

この時期の施設には、廃棄土坑に壊されているものや、石敷遺構に覆われたものに加えて、建物の方向が片倉屋敷の建物より北向きの方向のものがあります。

【礎石建物跡】石敷遺構の中に建物の礎石とみられる扁平で小さな石が幾つかみられます。これは石敷きより古い時代の建物と考えられますが、建物の全体形は不明です。また調査では小石が入る柱跡以外にも小さな穴を多数確認しており、これらの多くは建物の柱穴と考えられます。

【堀跡】南北方向の2号堀跡は溝の中に狭い間隔で柱を立てた構造で、屋敷の西側を区画した施設と考えられます。また4号堀跡は東西方向の掘立柱式の堀跡と考えられます。

【溝跡】21号溝跡は石組溝で、底には瓦を敷いており、建物を囲んでいたと考えられます。22号溝跡はL字形に曲がる溝跡で、他と方向が大きく異なっています。また2号溝跡と23号溝跡は幅が広く深い溝跡で、屋敷にあるいは屋敷内を区画した施設の可能性があります。

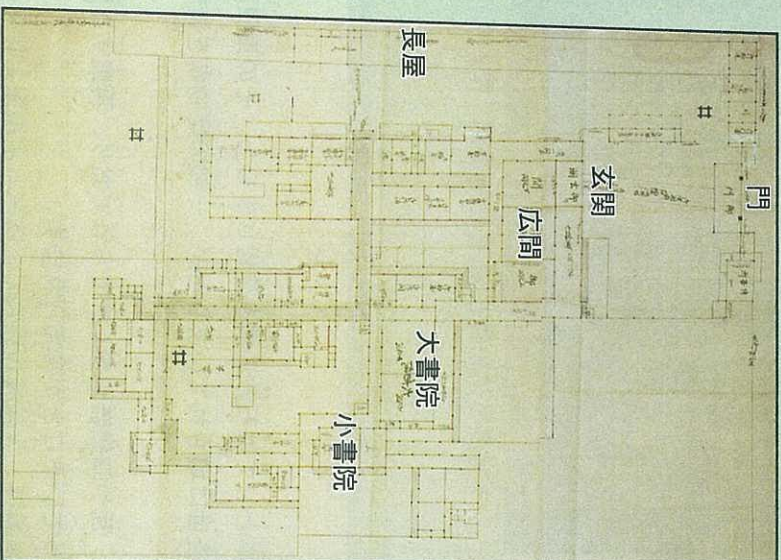
【石組遺構】6号石組遺構は方形の穴の壁に石を組んだもので、水を溜めるなどした施設とみられます。

【鍛冶炉】南西部で10か所の焼面を発見しました。一部から鉄製品などを作る際に出る、薄い鉄片が出土したことから、焼面はかつて建物内にあった鍛冶炉と考えられます。

【井戸跡】1号井戸跡は火災後に埋められたとみられることから、「片倉屋敷図」にみえる屋敷と長屋の間にあった井戸の可能性もあります。中に木製品などがすてられていました。183号土坑は円形で深く、226号土坑は内部に円形の石組みがあり、古い時期の井戸跡と考えられます。

【調査で出土した遺物】

屋敷で使用していた陶磁器や瓦が多数出土しました。陶磁器には片倉屋敷があった17世紀後半から幕末までの時期の中国・肥前の磁器のほか、瀬戸美濃・肥前・京信楽・大塚相馬・小野相馬・岸窯・埴などの産地の陶器があります。また16世紀末から17世紀前半のものには、織部・志野・備前・唐津・瀬戸美濃などがあります。中には13世紀代の中国の梅瓶も含まれており、これは伝世品と考えられます。瓦は全て本瓦で、主に門や長屋に使用されたと考えられます。



『仙台御屋敷御家作之御絵図』（仙台片倉屋敷絵図）
作製年不明 仙台市博物館所蔵



1号井戸跡 (北西から)



火災後に建てられた建物 (5号掘立柱建物跡)



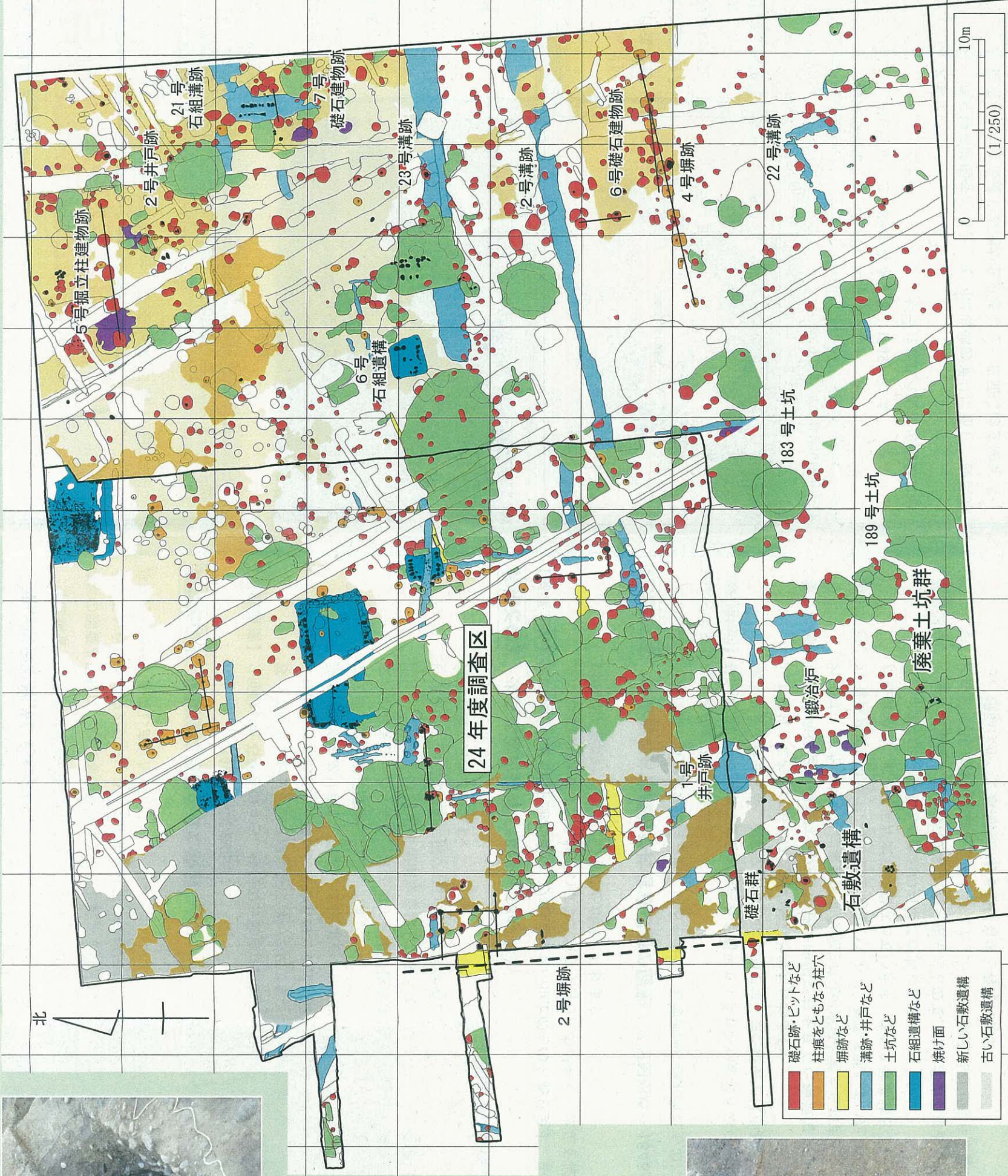
7号鍛冶炉 (北から)



2号井戸跡 (北から)



7号礎石建物跡と21号石組溝跡 (南から)



屋敷の西側に敷かれた石敷き (南から)



火災後に廃材などを埋めた土坑 (北西から)



6号石組遺構 (南から)

○ 調査のまとめ

- ・ 再建された片倉屋敷の遺構としては石敷遺構を確認しました。その東側に存在していた建物の跡は後世に壊されていましたが、一部の建物跡を確認しました。
- ・ 廃棄土坑 (ゴミ穴) には、瓦や陶磁器が多くすてられており、再建する建物の場所を避けて穴を掘っていることが考えられます。
- ・ 火災前の片倉屋敷や別の屋敷は、江戸時代初めから幾度かの変遷をしていることがわかりました。これらは時代により方向が少しずつ変わっています。